



子どもは、親から学んでいる

家庭は、人間が最初に出会う情緒学習の場です。親しい人間関係の中で、私たちは自分自身に対する感情を形成し、他人が自分の感情にどう反応するか学習します。またそうした感情をどう考えるべきか、反応としてどんな選択肢があるかを学びます。希望や恐怖をどう表現しどう読みとるかを学びます。子どもは自分に向けられた親の言動だけから情緒を学習するわけではありません。親自身が自分の感情をどう処理するか、おうちの人の間でどのような会話が交わされているか、なども見えています。



親が子どもをどう扱うか(厳格なしつけをするか、共感をもって教え諭すか、無関心か温かい交流があるか、等々)が子どもの人生の情緒的側面に深く永続的な影響をもたらすことは、幾多の研究で指摘されています。情緒面でかきこい親に恵まれることは、どれほど多大な利益をもたらすかが、数量的に明らかにされたのは、ごく最近のことです。

事例から学ぶ1

○積み木を二個与え、「こうやって並べてね」と、課題を出します。

子どもは、積み木をひとつなめて、髪の毛にこすりつけたりして、それからテーブルの下に、ぽんと落としました。取ってくれるか確かめているのです。積み木をとってやると、子どもはようやく与えられた課題どおりに二つの積み木を並べて、「ねっ、すごいでしょ」と瞳を輝かせてこちらを見上げます。

こういう子どもは、周囲の人々から褒められ励まされて育っているのです。人生でささやかなチャレンジに遭遇しても、きっと成功できるという自信をもっています。対照的に、冷酷で混乱した家庭、あるいは子どもに無関心な家庭で育った子どもは、同じ課題を与えられても、はじめから失敗するにちがいないと思いこんでいる様子を見せます。「ぼくなんかダメだ。ほらやっぱり失敗した。」このタイプの子は、長ずるにしたがって敗北主義的な人生観を抱き、教師から励まされることも注目されることも期待せず、学校生活に楽しみも見出さず、やがて落伍していくことになります。

事例から学ぶ2

生後二か月の赤ちゃんが、夜中の三時に目をさまして泣き始めたとしましよう。

- (1)母親がやってきて、三十分ほど相手をする。母親の腕に抱かれて、母親の愛情に満ちたまなざしに見つめられて、赤ちゃんは満足げに乳を吸う。真夜中に起こされたにも関わらず、母親は「あなたの顔が見られてうれしいわ。」と赤ちゃんに語りかける。母親の愛情に包まれて満足した赤ちゃんはやがて眠りの世界に落ちていく。
- (2)母親にいきなり抱き上げられ、「だまりなさい。いいかげんにしてよ、ほら、泣くなってば。」と言われた瞬間に、赤ちゃんは身を固くする。赤ちゃんに乳を含ませながら、母親は石のような表情で前方を見据えている。母親の緊張を感じとった赤ちゃんは、身をよじったり固くしたりして、

乳を吸うのをやめてしまう。「もういいの。じゃおしまい。」母親は乱暴に赤ちゃんをベッドにもどし、大腿で部屋から出ていく。赤ちゃんは泣いて泣いて泣き疲れて眠るのだ。

(1)の赤ちゃんは、周囲の人々は、自分の欲求に気づいて手をさしのべてくれるという信頼感を抱き、周囲から援助を得る自分の能力に自信を抱くようになります。

(2)の赤ちゃんは、誰も自分のことなど気にかけてくれない、他人はあてにならない、誰かに慰めてもらおうとすると失敗するだけだと感じるようになります。

※子どもが宿題がわからなくて、相談に来ることがあります。その時、機嫌良く相手にするか、「今大事な仕事をしているんだから」と拒絶する場合でも、赤ちゃんと同じような人間関係に対する情緒的期待を形成していきます。

事例から学ぶ3

ちょっとした家庭の悲劇です。

カールとアンは、五歳になったばかりの娘レスリーに新発売のテレビゲームを教えることになった。ところがレスリーがゲームを始めると、娘にうまくやらせようと思う気持ちの強すぎる父と母は、かえって邪魔をしてしまう。右から左と矛盾した命令がレスリーの耳にとびこんでくる。

「右へ行くの。右、ストップ、ストップストップ。」母親の声は次第に熱を帯びてくる。娘のレスリーは、唇をかみ、大きく見開いた目で画面を見つめながら、母親の言うようにコントローラーを操作しようとがんばっている。

「ほら並べなくちゃダメだよ。それ左、左だってば。」父親がぶっきらぼうに言う。母親はいらいらして天を仰ぎ父親の声をさえぎるように叫ぶ。「ストップストップ。」父親の言う通りにも母親の言う通りにもできないレスリーは、口もとをゆがめ、涙が盛り上がってきた両目をしばたいている。父親と母親は泣きそうな娘をほったらかしにして口げんかを始める。

涙のテレビゲームからレスリーが得るのは、両親は、誰も自分の気持ちなんか気にかけてくれないという結論しかない。このような経験が子ども時代を通して繰り返されると、子どもは人生の基本的な方向を歪めかねない情緒のメッセージを心に刻みつけることになる。

私たちの接し方や見える家庭での姿から、子どもの情緒が形成されていくとしたら、その場その場の感情で子どもと接するのではなく、

- 1 自分自身の気持ちがわかるようになってほしい。
- 2 自分の感情をコントロールできるようになってほしい。
- 3 他人の感情を理解できるようになってほしい。
- 4 人間関係をうまく処理できるようになってほしい。

などの願いの下、支援していく必要があると、この本を読んで感じました。

～参考文献 EQ こころの知能指数

ダニエル・ゴールマン 訳 土屋京子 講談社～

